三重県埋蔵文化財調査報告193

平成10年度県営ほ場整備事業（津中部地区）に伴う

神戸遺跡発掘調査報告

― 鳥井前地区 ―

1999・3

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県津市神戸・野田・南河路に所在する神戸遺跡第１次の発掘調査結果をまとめたもので、平成10年度県営ほ場整備事業に係る発掘調査報告書である。

2　本調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産商工部より執行委任を受けて、平成10年度県営ほ場整備事業に伴って実施し、調査費用はその一部を国庫補助金を受け三重県教育委員会が、他を三重県農林水産商工部と地元市町村が負担した。

3　調査の体制は以下のとおりである。

調　査　主　体　　三重県教育委員会
調　査　担　当　　三重県埋蔵文化財センター
　　調査第一課　　主事　中川　明、片岡　博
調　査　期　間　　平成10年６月22日～平成10年９月８日

4　調査にあたっては、三重県農林水産商工部農業基盤整備課、津地方県民局農林水産商工部、津中部土地改良区、津市教育委員会および地元の方々に協力をいただいた。

5　発掘調査後の遺物整理は、上記担当者のほか、資料普及グループ職員が補助した。

6　本書の執筆、編集および遺物写真撮影は、中川明が担当した。遺物の実測およびトレースは資料普及グループ職員、中川明が担当した。

7　本書で示す方位はすべて真北を用いた。なお、磁針方位は西偏６°40′（平成６年国土地理院）、真北方位は東偏０°18′である。

8　本文で用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。

ＳＢ：掘立柱建物　　ＳＤ：自然流路、溝　　ＳＫ：土坑　　Pit：柱穴、小穴

9　第１表で使用した地区名はＡ＝鳥井前地区、Ｂ＝高入地区に該当する。

10　本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
　　各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

Ⅰ　前　　言……（1）

Ⅱ　位置と環境……（3）
　1　位置と地形……（3）
　2　歴史的環境……（3）

Ⅲ　基本的層序と遺構……（5）
　1　層　序……（5）
　2　遺　構……（5）

Ⅳ　遺　　物……（12）

Ⅴ　調査のまとめと検討……（14）

挿図目次

第１図　遺跡位置図……（２）
第２図　調査区位置図……（４）
第３図　調査区土層断面図１……（６）
第４図　調査区土層断面図２……（７）
第５図　地区割図・遺構平面図……（９）
第６図　ＳＤ15遺物出土状況図……（11）
第７図　出土遺物実測図１……（14）
第８図　出土遺物実測図２……（15）
第９図　出土遺物実測図３……（16）
第10図　坪内区画想定図……（18）

表　目　次

第１表　出土遺物観察表……（19）

図版目次

ＰＬ　１　鳥井前地区遠景（北から）　　ＰＬ　２　出土遺物（土器）

Ⅰ　前　言

1　調査に至る契機

神戸遺跡は、津市神戸・南河路・野田に所在する面積10haの広大な遺跡である。津市の遺跡番号が598の周知の遺跡である。本調査は、平成10年度県営ほ場整備事業に先立って実施するものである。

当埋蔵文化財センターでは、関係事業部局からの事業照会を受けて、平成９年11月に試掘調査を実施した。事業予定地内に設定した77箇所のうち２坑から溝、土坑、ピットを確認した。当遺跡内の中央部から平安時代の土師器等が出土した。このことから当地区内には古代の遺構の所在が明白となった。

このことをふまえて、県農林水産商工部および津地方県民局農林水産商工部と文化財保護の協議を重ねてきた。その結果、市道南河路・神戸線、および市道博多・神戸線に隣接する事業地内に調査区を設定し、滅失する部分1,050㎡について緊急発掘調査を実施することになった。

2　調査の経過

調査は、鳥井前・高入・品田地区の計３区について実施した。調査期間は平成10年６月22日～同年９月８日の51日間である。

【調査日誌（抄）】

６月23日　重機による鳥井前地区表土掘削。
６月24日　高入地区表土掘削。
６月25日　重機移送、品田地区表土掘削。
　　現場事務所設置。
６月29日　品田地区全面トレンチ調査。遺構・遺物共に確認できず。
７月１日　作業員投入。鳥井前地区調査開始。
７月２日　包含層掘削。排水溝東壁掘削。
７月８日　包含層掘削８列終了。遺構（流路）検出。
７月10日　流路からＳ字甕完形で出土。
７月14日　土坑掘り下げ、Ｓ字甕出土。出土状況図作成。
７月21日　作業員４名追加任用。遺構確認。平板測量（北半部分）完了。
７月22日　第Ⅱ包含層掘削。流路断面の分層。
　　遺構平面図作成準備。
７月28日　農林、改良区、地権者を交え、排水路設定。
７月31日　流路完掘。平板測量再開。タワー設営。遺構写真撮影。
８月４日　鳥井前地区全面清掃。タワー設置、写真撮影。
８月５日　高入地区包含層掘削開始。
８月６日　鳥井前地区掘立柱建物一部検出。平面図作成。
８月11日　鳥井前地区、下層確認のトレンチ掘り下げ。上層の溝続き確認。土層断面図作成。
８月17日　高入地区、中央トレンチまで遺構掘削完了。
８月19日　遺構掘削完了。殆どが近世の流路と判断。
８月25日　作業員終了。鳥井前地区、土層断面図補足。
８月26日　鳥井前地区、平板測量完了。
８月28日　台風４号接近、暴風雨対策。業者へ通告。
９月２日　高入地区土層断面図作成。近世の畦畔?確認。条里制との関連性を検討。
９月３日　品田地区平板測量。表土、包含層面のレベル測量。汲み取り完了。
９月４日　発掘用具、プレハブ撤収。
９月７日　柱列の確認。ピット完掘。平面、断面図作成。
９月８日　全遺構確認。調査終了。

3　遺跡の名称について

本遺跡は、行政区域名称が津市神戸・野田・南河路に所在する。昨年度の試掘調査をもとに、津市教育委員会と協議を行った。その結果、当地区内には弥生時代～中世までの遺跡が散在的かつ複合的に分布することが明白になった。調査開始前に便宜的に設定してあったＡ、Ｂ、Ｃ地区を本報告から小字名に置き換え、呼称することにした。Ａを鳥井前、Ｂ

を高入、Cを品田地区と称する。

4　調査の方法について

(1)　調査区の設定

調査区は、既述の通り神戸遺跡、鳥井前・高入地区と品田地区の3地区を大地区とした。

鳥井前・高入地区は、調査範囲が連続し、L字状に配置されるため、両範囲の北と東から延びる軸（センターライン）の交点を基点とし、4m×4mのメッシュに区切ることで小地区を設定した。各地区の北西隅から東にA～Uの番号を、南に1～16のアルファベットを与えた。これをグリッド名で呼称した。小地区設定は国土座標軸に基づかない。

品田地区の調査は、グリッドを設定せず、重機によるトレンチ調査を実施した。

(2)　遺構図面について

各調査区の平面図は縮尺1/100で作成した。土層断面図は1/20、品田地区は略測でスケールアウトとし、個別の遺構実測図は、1/20の縮尺を用いた。

(3)　掘削について

掘削方法は、表土・旧耕作土を重機で、第II包含層以下、遺構までを人力で行った。品田地区は、人力掘削が不可能なため、重機掘削を実施した。

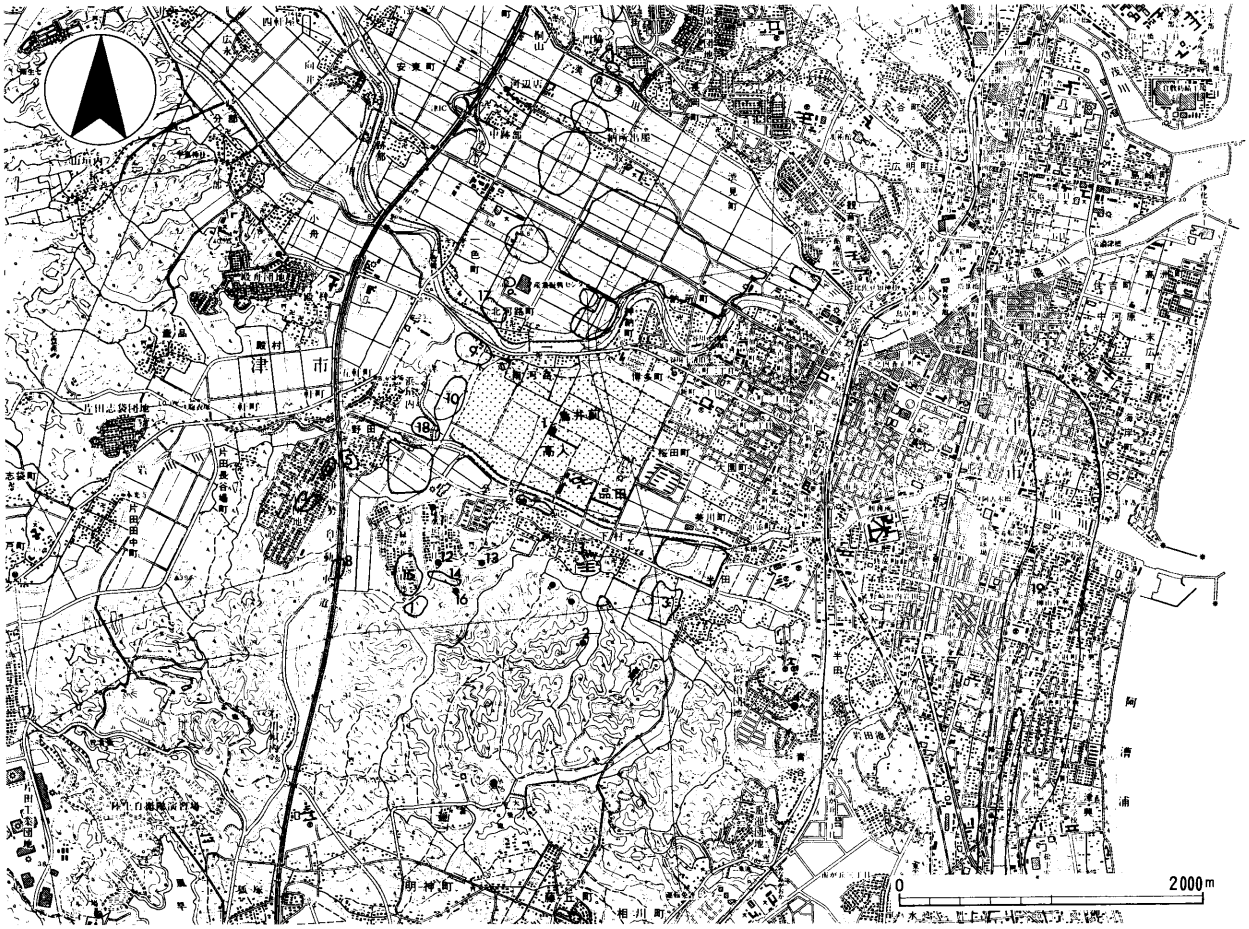
なお、鳥井前・高入地区の調査を補助していただいたのは、神戸・半田・野田地区在住の方々である。記して感謝いたします。（敬称略、順不同）

河合章一、本堂重一、尾市寿男、黒川勘一、田中寛、池田加代子、伊藤みちる、黒川定子、内藤みつ本堂志げ子、前川恵子、伊藤敏子、樋口三和、真弓幸子、真弓百合子、芳村洋子、黒川鶴子、高橋つや子。

5　文化財保護法に関する諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

- 法第57条の3第1項（文化庁長官あて）
  平成10年5月29日付農基第78－2号（県知事通知）
- 法第98条の2第1項（文化庁長官あて）
  平成10年7月2日付教生第56号（県教育長通知）
- 遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）
- 平成10年10月16日付教埋第2－6号(県教育長通知)



第1図　遺跡位置図（1:50,000）［国土地理院「津東・西部1:25,000」による］

II　位置と環境

1　位置と地形

伊勢湾西岸のほぼ中央に位置する津市は、安濃川・岩田川・志登茂川で形成された沖積平野にある。神戸遺跡（１）は、安濃川と岩田川に挟まれた沖積地に広がる。標高は平均約７ｍ、周辺の水田との比高差は約３ｍ未満で、西から東へと緩やかに傾斜する。当遺跡の西方には、長谷山丘陵裾部から延びる伊賀街道が通じており、古来より伊勢、特に安濃津と伊賀地方を結ぶ交通の要衝であった。また、当地は、神宮神領として統括されていたこともあり、伊勢神宮との関係は深い。以下、当地区の歴史的概観を記述する。

2　歴史的環境

(1)　弥生時代

集落南東部にある半田丘陵には、戦中・戦後、磨砂が多量に産出された採掘口がある。採掘の際に南の木の根地区で流水紋銅鐸（「神戸銅鐸」1917年）が確認されている②。一方、野田地区からも高さ63㎝の横帯紋銅鐸が出土しており[1]、遺跡周辺に分布する弥生時代後期集落の生産力、経済力が窺える歴史的発見である。岩田川の南岸、低位丘陵の畑地に位置する上村遺跡③で、中・後期の壺や石器が出土している[2]。近年、二度の調査で室町時代の砦跡に関連する遺構、遺物も確認され、複合遺跡であることが分かってきた（半田砦跡）。また、丘陵斜面では、弥生高松遺跡④から竪穴住居32棟と一連の丘陵頂部から後期の方形台状墓が確認されている[3]。野田地区の南西部にも後期が中心の野田古墳群⑤が分布している[4]。この稜線上には、昭和46・48年の団地造成や近畿自動車道の建設に伴い発掘調査された遺跡が集中する。北から順に柳谷遺跡⑥、大ケ瀬Ｂ遺跡⑦、平栄遺跡⑧である。それぞれ周溝を伴う竪穴住居が総計12棟確認されている。また、当遺跡から北西へ500ｍの安濃川右岸には、替田遺跡⑨が位置する。当時代中期の竪穴住居、土坑群が確認されている[5]。また、替田遺跡に連続する弐ノ坪遺跡⑩からは、焼失したとみられる竪穴住居が確認されている[6]。これら調査や発見を通じて当時の代表的な拠点集落の規模と推移が明らかにされつつある。

(2)　古墳時代

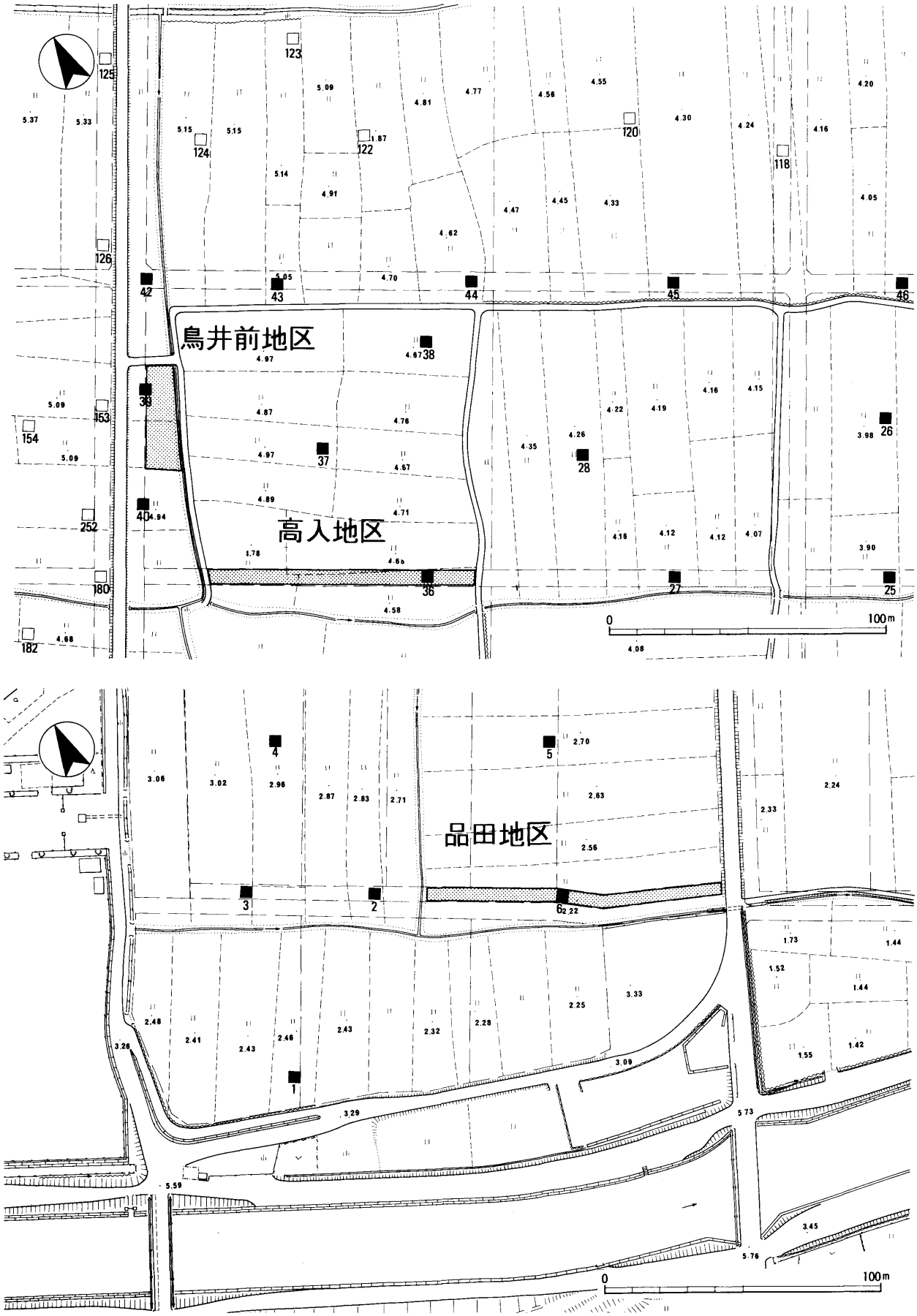
神戸地区の南から西側にかけて、標高30ｍほどの丘陵が連続している。北麓を中心に古墳群が点在する。特に柳谷遺跡⑥の竪穴住居に重複する形で後期の古墳群５基が確認されている。また、さらに東側には鎌切古墳群⑪が連続して築造されている[7]。同じ丘陵上におこし古墳⑫も造られており、中でも鎌切３号墳は全長50ｍの前方後円墳、おこし古墳は全長29ｍの規模を誇り、安濃川流域では特筆される。さらに支脈の丘陵では西垣内古墳⑬、名塚古墳群⑭、稲葉古墳群⑮、神戸古墳⑯と連続して分布する。

(3)　奈良時代～平安時代

安濃川中流の自然堤防上に広がる位田遺跡⑰で平安時代中期から後期の棟方向を揃えた掘立柱建物群が確認された。多量の緑釉陶器や硯、また24個の碁石といった特殊な遺物から富豪層の屋敷地の所在が注目されている[8]。これに続く替田遺跡⑨では、掘立柱建物、土坑、井戸が確認され、当遺跡周辺でも集落との関連が想定される[9]。さらに、南に隣接する弐ノ坪遺跡⑩からは古代条里制に係わる溝やこれらで区画された掘立柱建物が確認されている。当時代の集落規模や建物の規則性が導き出される調査である[10]。野田地区の東端には里前遺跡⑱があり、平成10年度調査によって多数の井戸が確認された。井戸内から灰釉陶器や墨書山茶椀等が出土している[11]。これらは土器の流通においても重要な遺跡と言える。

(4)　中世以降

在地領主制下における遺跡としては、川北城が挙げられる。地頭関係の住居跡では唯一の資料である。また、安濃津遺跡群⑲は明応の大地震で壊滅的な被害を受けた15世紀末の代表的な遺跡で、日本三津の一つ安濃津の想定地である。調査の結果、13世紀に始まる建物群とそれらの断絶期が明らかにされた。尾張産の未使用山茶椀や「丁綱」と書かれた墨書が発見され、海外との流通経路や港町の経済的な発展過程を知る上で貴重な遺跡である[12]。



第２図　調査区位置図（1:2,000）［■Ｈ９年度試掘坑、□Ｈ10年度試掘坑］

III　基本的層序と遺構

1　層　序

調査区は、３箇所に分かれており、鳥井前地区から東方に向かって緩やかに傾斜し、かつての流路もほぼ同方向に乱流していたことが窺える。鳥井前地区での層序もその特徴が色濃い。

鳥井前地区東壁では、地表面下40～50㎝で黄褐色系の基盤層を確認できたが、高入地区では、地表面下30㎝で湧水が激しく、基盤層は確認できていない。

品田地区は、全体が泥湿地化しており、地表面は青灰系の粘土層が分厚く堆積していた。50㎝以下で湧水が激しく、基盤層の確認に至っていない。

以下、鳥井前・高入地区・品田地区の基本的な層序を順に記述する。

(1)　鳥井前・高入地区の層序

第１層：褐灰色土（耕作土）
第２層：にぶい黄褐色土（第Ⅰ包含層）
第３層：黄褐色土（細砂）
第４層：褐色砂質土（第Ⅱ包含層）
第５層：にぶい黄褐色土（基盤層）

(2)　品田地区の層序（トレンチ確認）

第１層：暗茶褐色土（耕作土）
第２層：暗灰褐色粘土
第３層：青灰褐色シルト（粗砂）
第４層：青灰色粘土

2　遺　構

今回の調査では、弥生時代後期後半から、鎌倉時代の遺構を確認した。流路および土坑、掘立柱建物を時代順に以下、記述する。

－鳥井前地区－

（１）古墳時代の遺構

Ａ流路

ＳＤ２　Ｙ列２～Ｂ列８グリッドで検出した。最大幅４ｍ、最深0.4mの遺構である。Ｂ６グリッドで分岐し、南流する流路である。ＳＫ１、ＳＤ７に先行する。埋土から台付甕（３～13)が出土した。

ＳＤ３　Ｃ列２～４グリッドで検出した。最大幅1.2m、最深0.4mである。南流し、調査区東壁付近で屈曲し、調査区外へ延びる。

ＳＤ４　Ｃ列３～５グリッドで検出した。最大幅1.5m、最深0.4mである。ＳＤ５に先行する。

ＳＤ５　Ｂ列３～Ｃ列５グリッドで検出した。最大幅1.2m、最深0.4mである。北側の状況は、試掘坑と重なり、不明である。

ＳＤ７　Ａ列６～Ｃ列６グリッドで検出した。最大幅２ｍ、最深0.5mの東流する。一部がＳＤ２と重複する。流路中央部から欠山期の台付甕が完形で出土している。

ＳＤ８　Ａ列５～Ｃ列10グリッドで検出した。最大幅2.5m、最深0.5mで、ＳＤ２と同方向に流れる遺構である。遺構は両端部から調査区外へ延びる。

ＳＤ10　Ａ列７～Ｂ列10グリッドで検出した。上位のＳＤ８と重複する。幅0.6m、深さ0.2mである。埋土が灰白細砂の他とは特異な遺構である。

ＳＤ12　Ａ列１～Ｃ列６グリッドで検出した。幅0.9m、深さ0.4mである。遺構は両端部から調査区外へ延びる。ＴＫ207と併行の有蓋高杯が出土している。

ＳＤ13　Ｂ列１～Ｃ列３グリッドで検出した。遺構南端については、上位の遺構埋土と見極めがつかず肩部は不明瞭であった。最大幅1.2m、最深0.3mである。遺物は小片が目立ったが、古墳時代後期の遺構とみられる。

ＳＤ14　Ａ列４～Ｂ列７グリッドで検出した。幅0.8m、深さ0.4mである。北側でＳＤ15と重複する。南端は土坑状になり、流れが止まる。

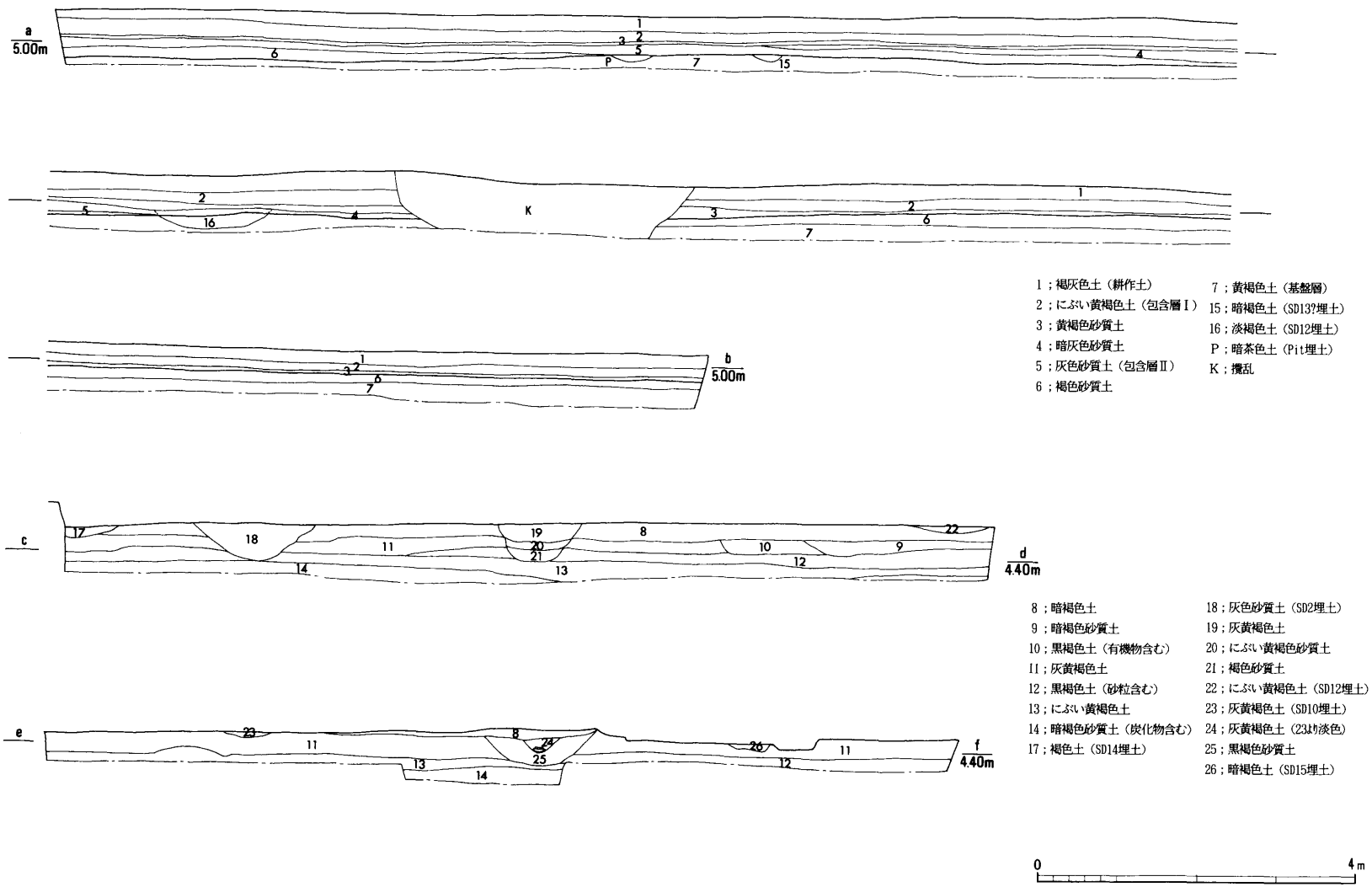
ＳＤ15　Ａ列４～Ｃ列10グリッドで検出した。最大幅1.7m、最深0.6mである。上位ＳＫ９、ＳＤ11との合流地点で床部から土師器甕が広範囲で出土した。（第６図）

ＳＤ11　Ｙ列２～Ｃ列８グリッドで検出した。上位のＳＤ２と流入部が重複し、南流する。幅1.2m、深さ0.4mで断面が若干のＶ字形を呈する。遺構は両端部から調査区外へ延びる。５世紀後半の須恵器杯蓋・杯身（28～30）が出土している。

Ｂ土坑

ＳＫ１　Ａ列３・４グリッドで検出した。長径

鳥井前地区

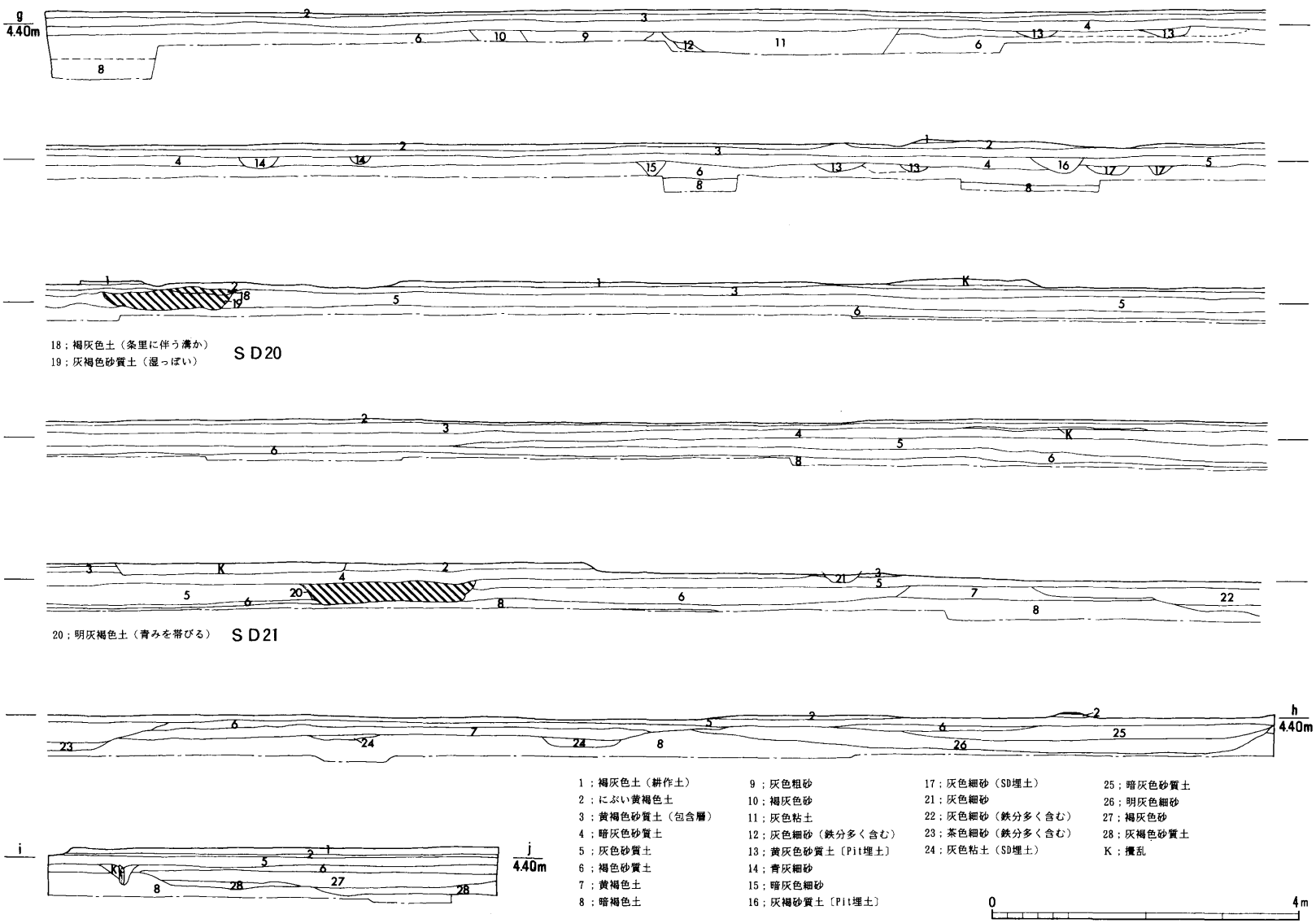


1；褐灰色土（耕作土）
2；にぶい黄褐色土（包含層Ⅰ）
3；黄褐色砂質土
4；暗灰色砂質土
5；灰色砂質土（包含層Ⅱ）
6；褐色砂質土
7；黄褐色土（基盤層）
15；暗褐色土（SD13?埋土）
16；淡褐色土（SD12埋土）
P；暗茶色土（Pit埋土）
K；攪乱

8；暗褐色土
9；暗褐色砂質土
10；黒褐色土（有機物含む）
11；灰黄褐色土
12；黒褐色土（砂粒含む）
13；にぶい黄褐色土
14；暗褐色砂質土（炭化物含む）
17；褐色土（SD14埋土）
18；灰色砂質土（SD2埋土）
19；灰黄褐色土
20；にぶい黄褐色砂質土
21；褐色砂質土
22；にぶい黄褐色土（SD12埋土）
23；灰黄褐色土（SD10埋土）
24；灰黄褐色土（23より淡色）
25；黒褐色砂質土
26；暗褐色土（SD15埋土）

第３図　調査区土層断面図１（1:80）

高入地区



18；褐灰色土（条里に伴う濃か）
19；灰褐色砂質土（湿っぽい）

20；明灰褐色土（青みを帯びる）

1；褐灰色土（耕作土）
2；にぶい黄褐色土
3；黄褐色砂質土（包含層）
4；暗灰色砂質土
5；灰色砂質土
6；褐色砂質土
7；黄褐色土
8；暗褐色土
9；灰色粗砂
10；褐灰色砂
11；灰色粘土
12；灰色細砂（鉄分多く含む）
13；黄灰色砂質土〔Pit埋土〕
14；青灰細砂
15；暗灰色細砂
16；灰褐砂質土〔Pit埋土〕
17；灰色細砂（SD埋土）
21；灰色細砂
22；灰色細砂（鉄分多く含む）
23；茶色細砂（鉄分多く含む）
24；灰色粘土（SD埋土）
25；暗灰色砂質土
26；明灰色細砂
27；褐灰色砂
28；灰褐色砂質土
K；攪乱

第４図　調査区土層断面図２（1:80）

4.1m、短径2.8m、深さ0.3mである。東側縁部は下位のＳＤ２の肩部と重複する。須恵器坏身（20・21）が出土している。検出時は検出ラインが不明瞭であったが、埋土が褐色砂質土で異なったため、ＳＤ２埋没後の遺構であると判断した。

ＳＫ９　　Ｃ列７～８グリッドで検出した。埋土がＳＤ15と類似し、前後関係が不明瞭であるため、同一遺構の可能性がある。縦2.5m、横1.3m、深さ0.6mの不整形な遺構である。古墳時代中期の台付甕（25）が出土した。

（２）奈良時代後期～平安時代の遺構

Ａ掘立柱建物

ＳＢ16　　Ｙ～Ａ列１グリッドで検出した。１間×２間以上の東西棟（Ｎ38°Ｅ）である。柱間は、梁行1.5m×桁行1.5mの等間である。建物全体は北側（市道）へ延長する。柱掘形は一辺が0.5mの方形である。柱痕跡は径0.3mである。（第５図）

－高入地区－

（１）古墳時代の遺構

Ａ溝

ＳＤ４　　Ｄ列15グリッドで検出した。最大幅1.8m、最深0.4mで南流し、両端は、調査区外へ延びる。検出時には、自然流路としていたが、断面形状と埋土から人工溝であると判断した。

（２）平安時代の遺構

Ａ掘立柱建物

ＳＢ10　　Ｕ～Ｖ列15グリッドで検出した。１間以上×６間の南北棟（Ｎ15°Ｅ）である。柱間は、梁行1.5m×桁行1.5mで、桁行は調査区外へ延びる。柱掘形はＳＢ６と比較すると、やや楕円気味であるが、一辺が0.5mである。柱痕跡は、上位の時期不明の溝と重複するため、不明瞭である。

（３）鎌倉時代～室町時代の遺構

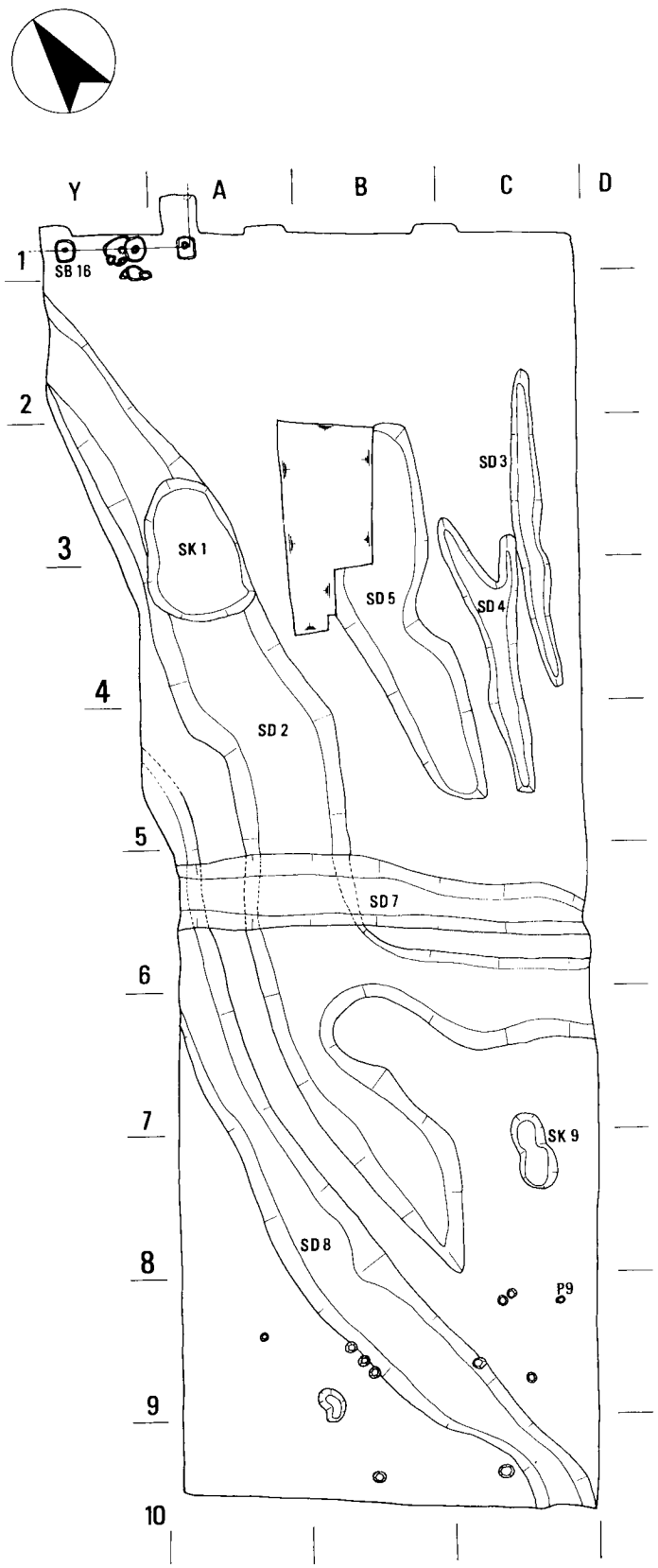
Ａ土坑

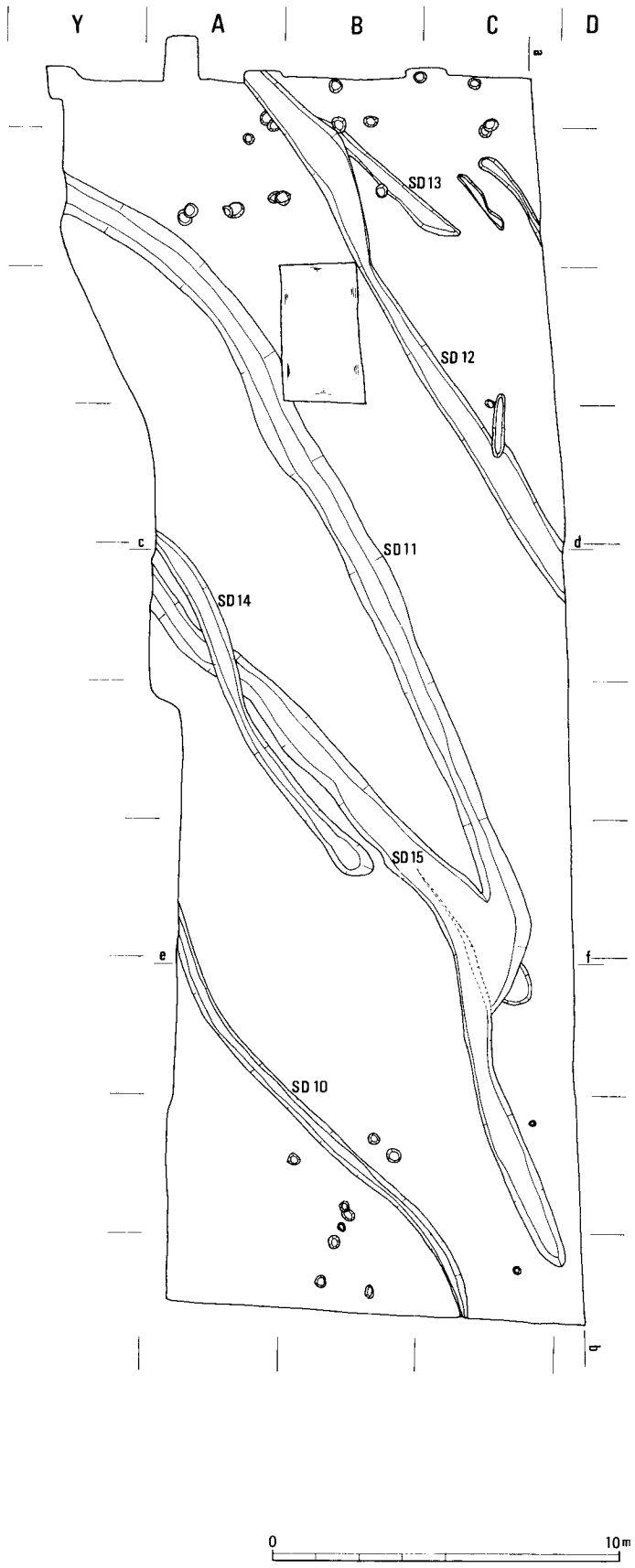
ＳＫ１　　Ｄ列14グリッドで検出した。南北径1.4mである。西半分はトレンチによって削平され、平面形状は不明である。東側の時期不明の流路と重複している。暗青灰色の埋土から15世紀後半の山茶椀、土師器皿が出土した。

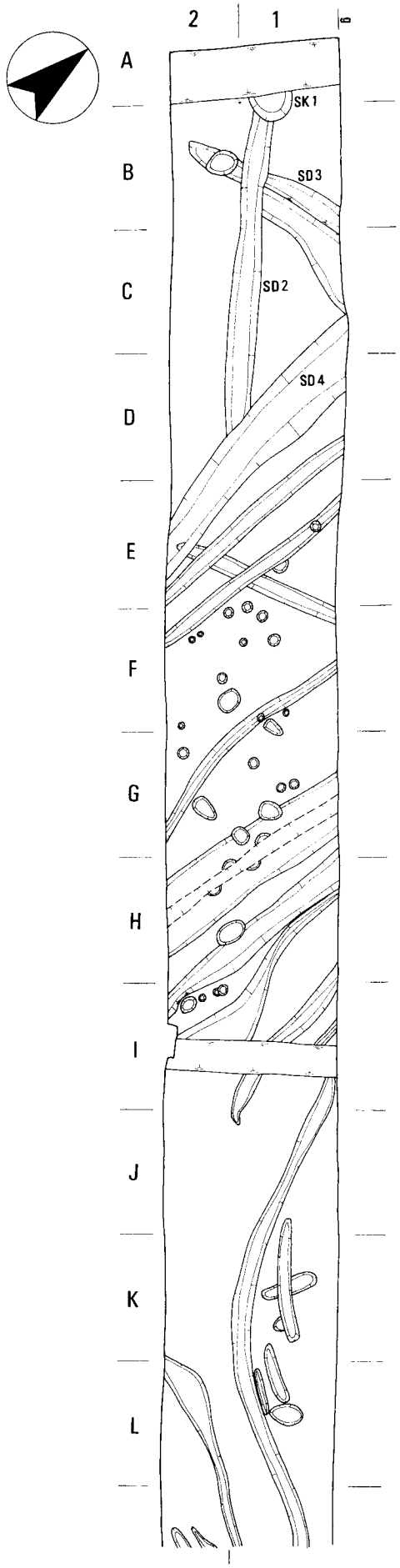
【註】

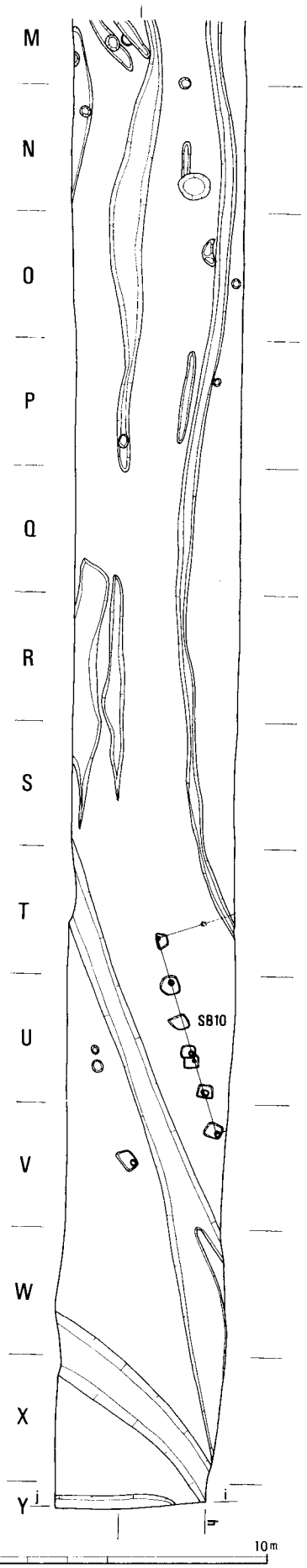
① 神戸村・野田村『三重県の地名』日本歴史地名大系24　平凡社　1983
② 吉村利男『半田上村遺跡発掘調査報告』津市教育委員会　1972
③ 谷本鋭次『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市教育委員会　1970
④ 浅生悦生『野田遺跡群発掘調査報告』津市教育委員会　1974
⑤ 山本義浩ほか「位田遺跡・替田遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅸ・Ⅹ　三重県埋蔵文化財センター　1996
⑥ ⑤に同掲載
⑦ 原始古代史部会「津市鎌切前方後円墳について」『ふびと22』三重大学学芸学部歴史研究会　1964.7
⑧ 山本義浩「位田遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅸ　三重県埋蔵文化財センター　1997
⑨ ⑤に同掲載
⑩ 池端清行「弐ノ坪遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅹ　三重県埋蔵文化財センター　1998
⑪ 『中勢道路調査ニュースNo.33』三重県埋蔵文化財センター　1998.8
⑫ 伊藤裕偉「Ⅶ総括」『安濃津』　三重県埋蔵文化財センター　1997
⑬ 山田猛「弥生・古墳時代の遺物」『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1994
⑭ 伊藤裕偉『嶋抜　第一次調査』三重県埋蔵文化財センター　1998
⑮ 「斎宮跡の土師器」『史跡斎宮跡発掘調査概報』三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所　1985
　大川勝宏「斎宮の墨書土器」『斎宮歴史博物館研究紀要』二　斎宮歴史博物館　1993
⑯ 『日本出土銭総覧』兵庫県埋蔵銭調査会
⑰ 山本雅靖編「10　三重県」『日本土器製塩研究』青木書店　1994
⑱ 伊藤裕偉「土器の変遷」『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1996
⑲ 藤澤良祐「山茶椀と集落」『尾呂』瀬戸市教育委員会　1990
　〃　「山茶椀研究の現状と課題」『研究紀要』第三号　三重県埋蔵文化財センター　1994

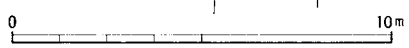
墨書については榎村寛之氏より御教示。



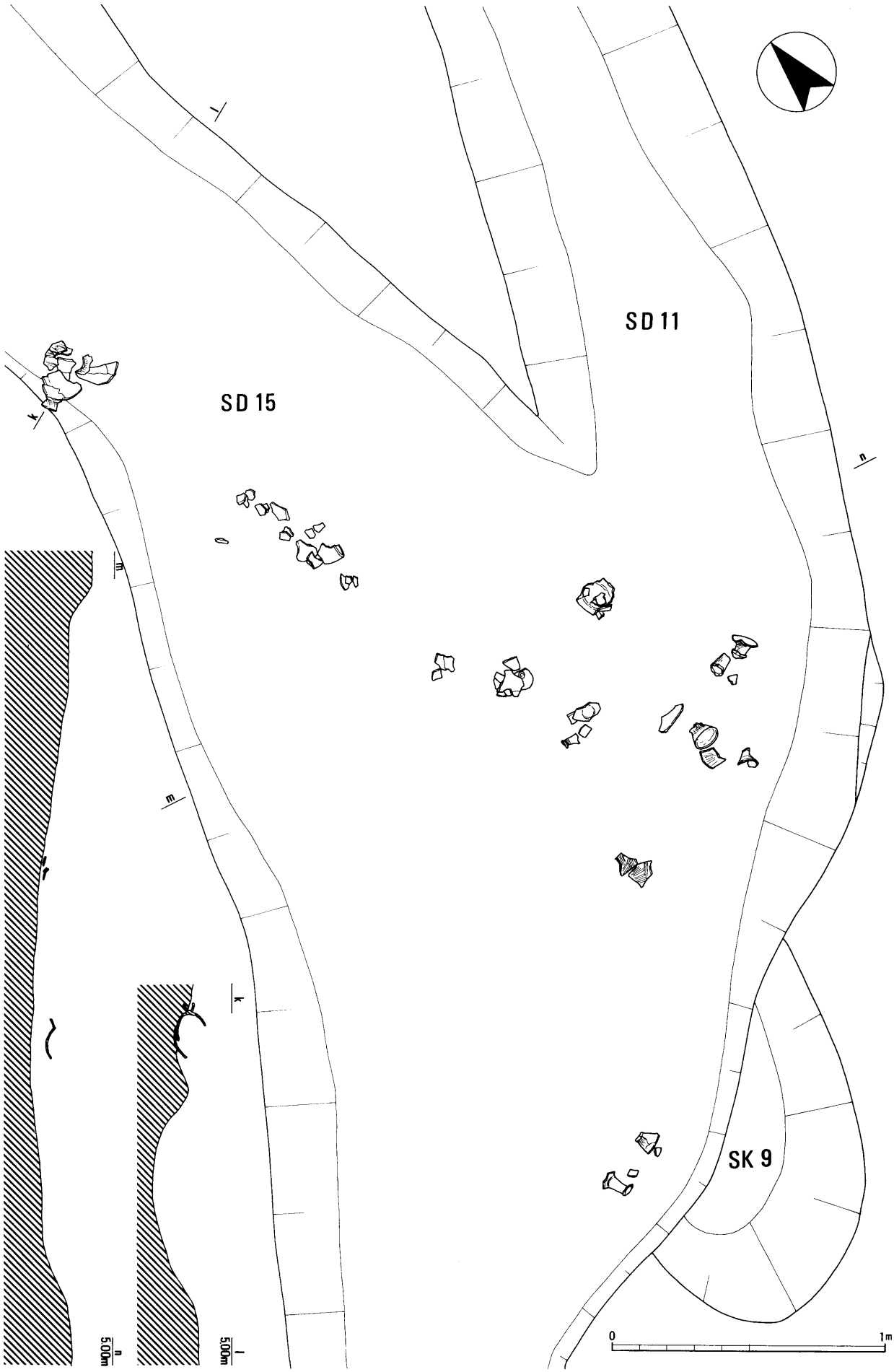








第5図　地区割図・遺構平面図（1:200）



第６図　ＳＤ15遺物出土状況図（1:20）

Ⅳ　遺　　物

調査区全体から出土した遺物はコンテナバットで22箱である。鳥井前地区の遺構出土の遺物は、古墳時代の遺物が大半を占める。奈良～平安時代の遺物は2割程度であった。特に包含層は2面検出しており遺物には二重口縁壺やミニチュア土器、手捏ね土器、銭貨など僅か含まれる。

以下、遺構・Pit・包含層・試掘調査の出土遺物を順に概略、記述する。

1　古墳時代の遺物（鳥井前地区）

(1)　ＳＤ２出土遺物（１～15）

土師器器台　（１）は脚部は直線的に開き安定している。受部の上端外面に3箇所、2対の浮文が施されている。脚中央部に3箇所、透孔が穿たれている。

土師器高杯　（２）には、全面に縦方向のミガキが施されている。脚部に3箇所の透孔がある。

土師器台付甕　（３・４）の口縁端部は、外反気味に立ち上がり丸みを帯びる。内面は指オサエ後にナデが施されている。山田氏編年の山城Ⅲ式期に相当する[13]。（13）の口縁端部はヨコナデが強められ垂下し、面をもつ。

(2) ＳＤ４出土遺物

土師器台付甕　（16）の頸部の屈曲は緩く、体部にかけて直線的に成形されている。

(3)　ＳＤ５出土遺物

土師器小形鉢　（17）は口縁残片である。内面に段をもつ。端部はヨコナデされてやや外反する。雲出島貫遺跡ＳＤ55からも同形状のものが確認されている[14]。

(4)　ＳＤ７出土遺物（18・19）

土師器台付甕　（18）は完形品である。既述の甕と比較すると口縁部に厚みがある。口縁部外面はヨコナデされ、直線状である。端部から頸部にかけての変換点は稜をなし、体部にかけての屈曲の度合いは強い。体部内面は、不明瞭ながらケズリ後にナデられている。脚部は折り返しが施されている。

須恵器杯蓋　（19）の天井部外面にはヘラ記号が刻まれている。口縁部との境には、やや太めの沈線が１条施されている。

(5)　ＳＫ１出土遺物（20・21）

須恵器杯身　（20）口縁部は、受部から直線的に引き上げられる。端部までの立ち上がりはやや内傾する。（21）の受部からの立ち上がりは短く、内傾する。時期的には古墳時代後期に相当する。

(6)　ＳＤ８出土遺物（22・23）

土師器壷　（22）には、木葉痕跡が残存する。本調査では、他に同様のものが１点、包含層から出土している。

土師器甕　（23）の口縁は緩く外反し、端部は強くナデられて内側し、丸くおさめられて稜となる。

脚部が接合するタイプとも考えられる。

(7)　ＳＫ９出土遺物（24・25）

土師器台付甕　（24）は口縁、（25）は脚部の残片である。ＳＤ15からも同形状のものが出土している。（25）のオサエは強く、明瞭である。脚端部は偏平に折り返えされる。ともに山城Ⅲ式期に相当する。

(8)　ＳＤ11出土遺物（28～32）

須恵器有蓋高杯　（28）のように脚柱部に横方向のカキメを施した有蓋高杯は、本例を含め2点出土している。

須恵器杯蓋　（29）は（19）と比較すると天井部は高く、外面はヘラケズリ調整され、平坦である。口縁部との境に１条の沈線が施されている。

須恵器杯身　（30～32）は、どれも既述のものと比較すると受部から底部にかけての膨らみは小さく、偏平である。立ち上がりも短い。

(9)　ＳＤ12出土遺物（33・34）

土師器杯　（33）は、底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。端部は外反せず、ほぼ直線的に延び丸みを帯びる。

須恵器有蓋高杯　（34）は、第Ⅰ包含層の混入品（28）に比較すると、脚柱部は太く、杯底部からカキメが施されている。外面に3箇所の透孔が開けられている。

(10)　ＳＤ15出土遺物（35～42）

土師器高杯　（35）は、口径は15.2cmである。内外面ともに縦方向のミガキが施される。

（36～38）は、検出時の混入品である。（38）は、（36・37）に比較し短脚で安定感がある。

土師器壷　（39）は、口縁は端部が強くヨコナデされ受口状を呈する。体中央～底部の外面にヘラケズリが施される。体部内面は、オサエ後ナデ調整されている。

土師器台付甕　（40・41）は「S字甕」の最古型式のものである。（40）は口縁部外面に列点列、頸部に指圧痕が見られ、直下には、工具による斜め方向のハケメが施される。（41）の外面のハケメは底部まで及んでいる。内面はオサエ後ナデられ、端部は軽く折り返されている。

ミニチュア土器壷　（42）は、球状を呈す。底部からの立ち上がりで、器厚が増す。

2　平安時代前期の遺物（高入地区）

(1)　SD4出土遺物

土師器甕　（43）は口縁部は、肥厚して外反し、端部は強くナデられて、上方に摘まみ上がり稜をなす。

(2)　Pit9出土遺物

黒色土器椀　（44）は内面黒色で、薄手である。内外面横方向のヘラミガキが施される。斎宮編年の平安時代II期に相当する[15]。

3　包含層・トレンチ出土遺物

弥生時代～中世の遺物（45～53）

磨製石斧　（51）の刃部は表面のみ加工されている。左右に剥離がみられるのは二次利用の痕跡と考えられる。

二重口縁壷　（45）は一次口縁端部が強くナデられて、外方向に張り出す。（46）は一次、二次口縁の中央にそれぞれ粗いミガキが施される。内面は、頸部以下にケズリ後のナデ調整がみられる。（47）の一次口縁外面に斜行ハケメが施されている。

小形丸底壷　（48）は口縁部は、長く延びて直線状をなし、外形は鉢状に見える。外面は底部に至るまでオサエ後ナデられている。

ミニチュア脚付壷　（49）は実用品を模してつくられた、口径が2.9cmの精緻な壷である。脚部は、器高1/3程度で、八字に開き安定している。口縁端部は、横方向に引き出され、丸く収められている。

土師器台付甕　（50）は（19）と比べると一回り小さい。口縁は頸部からの屈曲が鋭角的で、偏平である。脚部に施された外面ハケメは上位1/3に止まる。

銭貨（元豊通寶）　（53）は北宋銭である。初鋳は1078年である[16]。

4　試掘調査出土遺物

鳥井前地区では見られなかった製塩土器や墨書山茶椀が含まれている。時代順に報告する。

(1)　弥生時代の遺物

弥生土器甕　（54）の外面は縦ハケ調整され、丸みを帯びる。内面には胴部から口縁に至る横方向のハケメが施される。端部は等間隔に押圧が施される。

土師器高杯　（55）の脚中央、やや下に7箇所の孔が穿たれている。

(2)　奈良～平安時代の遺物

製塩土器　（56～58）（56）は平底で垂直に立ち上がる。浅鉢形の志摩式製塩土器である。口縁端部はやや外反気味に丸められている。山本氏編年のC類に相当し、9世紀第II四半期とみられる[17]。（58）の口縁部は器厚が増し、屈曲部は外方向にやや稜をなしている。同編年のBI類に相当し、平安時代中期の遺物と考えられる。

土師器皿A　（59）は口径が21cmの皿である。口縁部のみ横方向にミガキが施される。斎宮編年の第II期に相当する。

土師器杯　（60）の内外面ともにロクロナデが施される。底部外面に「東」とも読める墨書が記されている。

緑釉陶器　（61・62）ともに底部小片である。（61）は（62）に比較し、器厚は薄く、高台端部は不安定である。

(3)　中世の遺物

陶器山茶椀　（63）の口縁は内外面ともにロクロナデ調整され、端部は外反する。底部外面に糸切り痕がみられる。

土師器皿　（64）は口径8cmの小形の皿である。口縁の内外面にオサエが施される。伊藤氏編年のIIIa期以降の品で、15世紀中葉頃と考えられる[18]。

墨書山茶椀　（65～67）（67）の口縁はロクロナ

デされて、端部は上位に摘み上げられて丸みを帯びる。底部外面に「の」字の墨書が記されている。藤澤編年の第6型式に相当する[19]。（65）の墨書は、荒木田氏系の花押とも考えられる。（66）は同編年の第7型式に相当する。「壱郡」と判読できる墨書が記されている。

V　調査のまとめと検討

1　遺構について

鳥井前地区の発掘調査前に現況観察を行ったところ、水田面は北端部ほど地盤が高くなっていた。調査の結果、奈良～平安時代の掘立柱建物を検出した地表面とを比較、検討したところどちらも高位で確認することができた。

しかし、古墳時代の遺構検出を進めていくと、周辺は氾濫原が広がることが明らかになってきた。建物群は確認していない。ここでは土壌が粘土およびシルト層を基本とする沖積平野の特徴が著しいことであった。

これらのことから建物が築造されてくるのが早くとも奈良時代後期になってからであるとみられる。試掘調査の結果、ピットや溝が鳥井前地区周辺で確認されているので建物群が当地区の北側に広がることはより明らかである。

2　遺物について

本報告では、鳥井前地区出土の古墳時代の土器（47点）を取り上げた。詳細な組成は調査していないが当代の遺物は7割程を占めている。奈良～平安時代は2割程を占める。以下、特徴ある遺物2品について補足しておきたい。

黒色土器椀（No.43）は、単独の出土品であった。黒色土器の出土例は、三重県全域の幅広いエリアに及んでいる。津市神戸地区周辺では替田遺跡、位田遺跡に類例があり、9世紀後半期に相当することが報告されている[20]。それらと比較すると、口径は大きく偏平である。

さらに平成10年度試掘調査の製塩土器（No.56～58）は、口径が15cm程度のもので、中位のものにあたる。山本雅靖氏の形態分類の9世紀第II四半期頃のものと考えられる。胴部が外反し、口縁直下で径が最大になる特徴は同じである。これら志摩式製塩土器は伊賀・伊勢・志摩に至る100を上回る遺跡で出土している。[21]

3　条里制と現在の土地区画について

この地域のほ場整備事業が初めてであり、古代の条里地割りを遺構等の配置から比較的容易に復元できるという感があった。高入地区の北壁で観察した溝ＳＤ20・21が現在の水田の畦畔と重複することが明らかになったので、条里区画についての論考をもとに検証してみた。

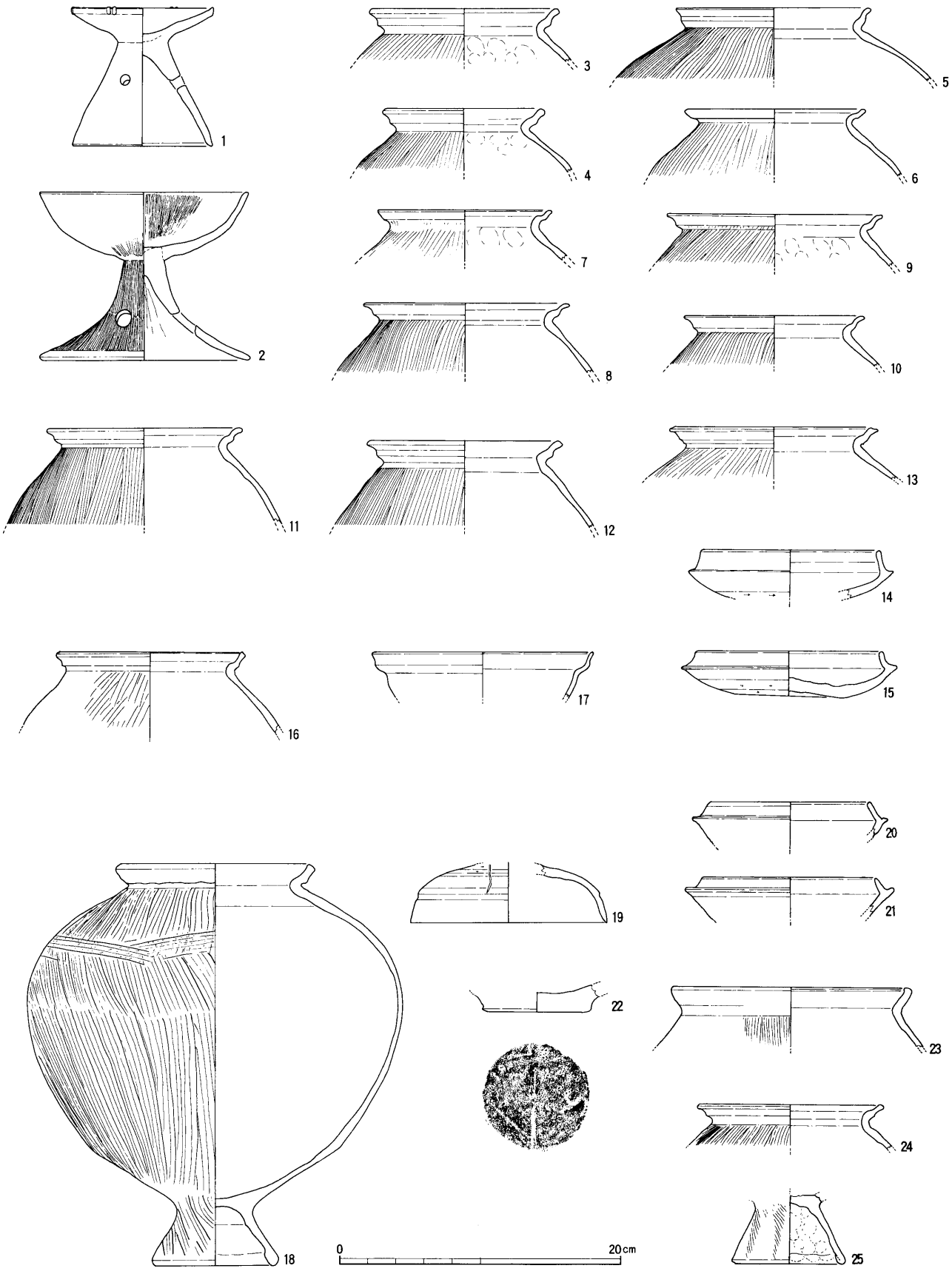
山口格氏によると、太田遺跡・蔵田遺跡・平田遺跡で東西に延びる溝・掘立柱建物が「N30° E」と重複している。（条里推定方向と整合する）しかし、これらは奈良・平安時代のものでなく、中世以降の遺構群と条里区画の整合性がとれる、と説明されている[22]。そこで昭和33年・45年の津市都市計画図および現在の都市計画図と空中写真をもとに比較検討した。その結果、南北に縦貫する生活道路と畦畔がほぼ重複し、上記の溝間も約33mになることも明らかになった。これらのことからこの溝が条里制に係わる「坪」区画と仮定するに至った。しかし、出土遺物は1点もなく、古代～中世の条里区画との関連性をより具体的にするには至っていない。今後の鳥井前地区周辺で実施される調査に期待される。

【註】

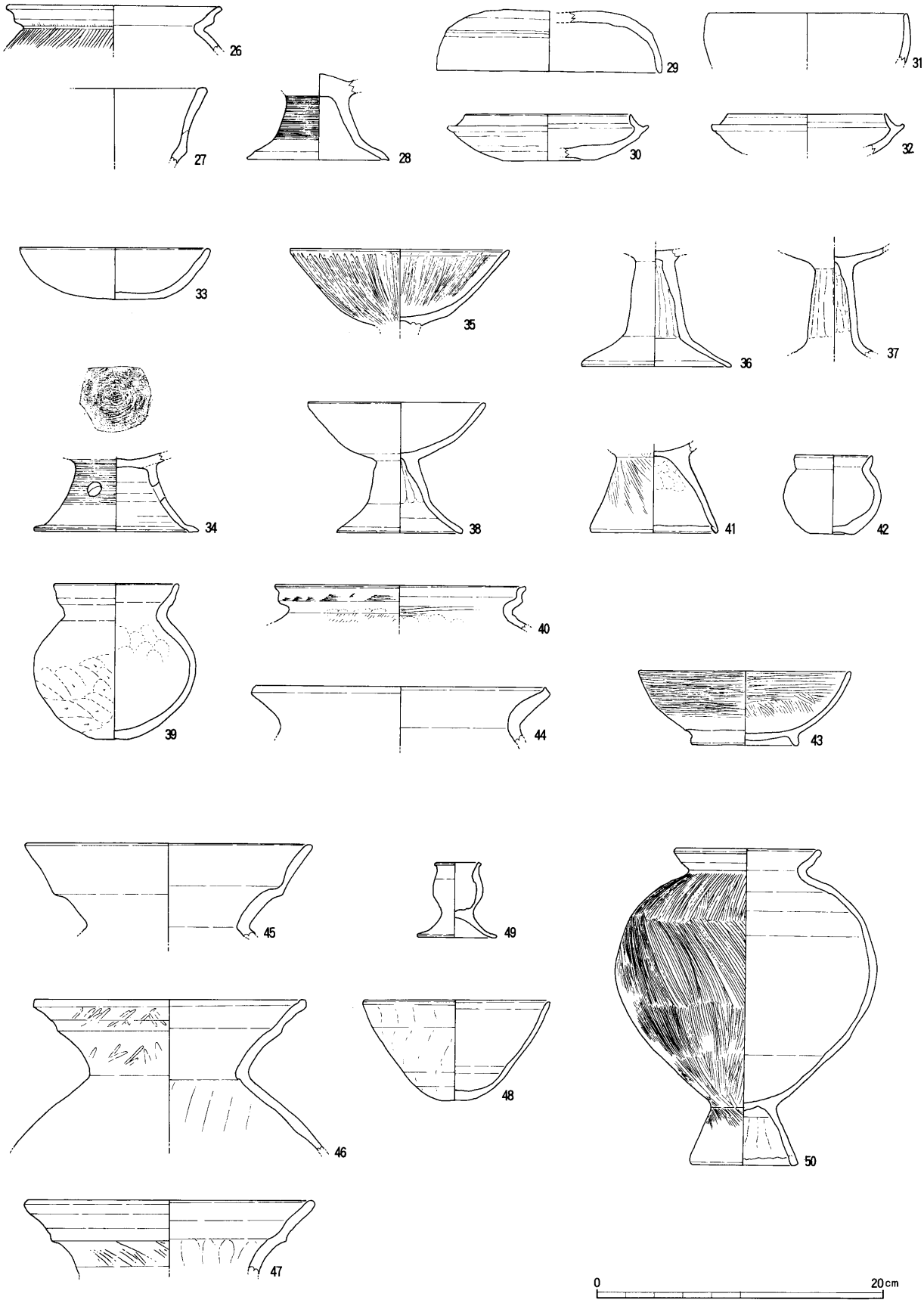
⑳　三重県埋蔵文化財センター　1997、1998分の調査区

㉑　森　泰通「東海地方における消費地出土の製塩土器」『シンポジウム　製塩土器の諸問題』塩の会、シンポジウム実行委員会　1997.10

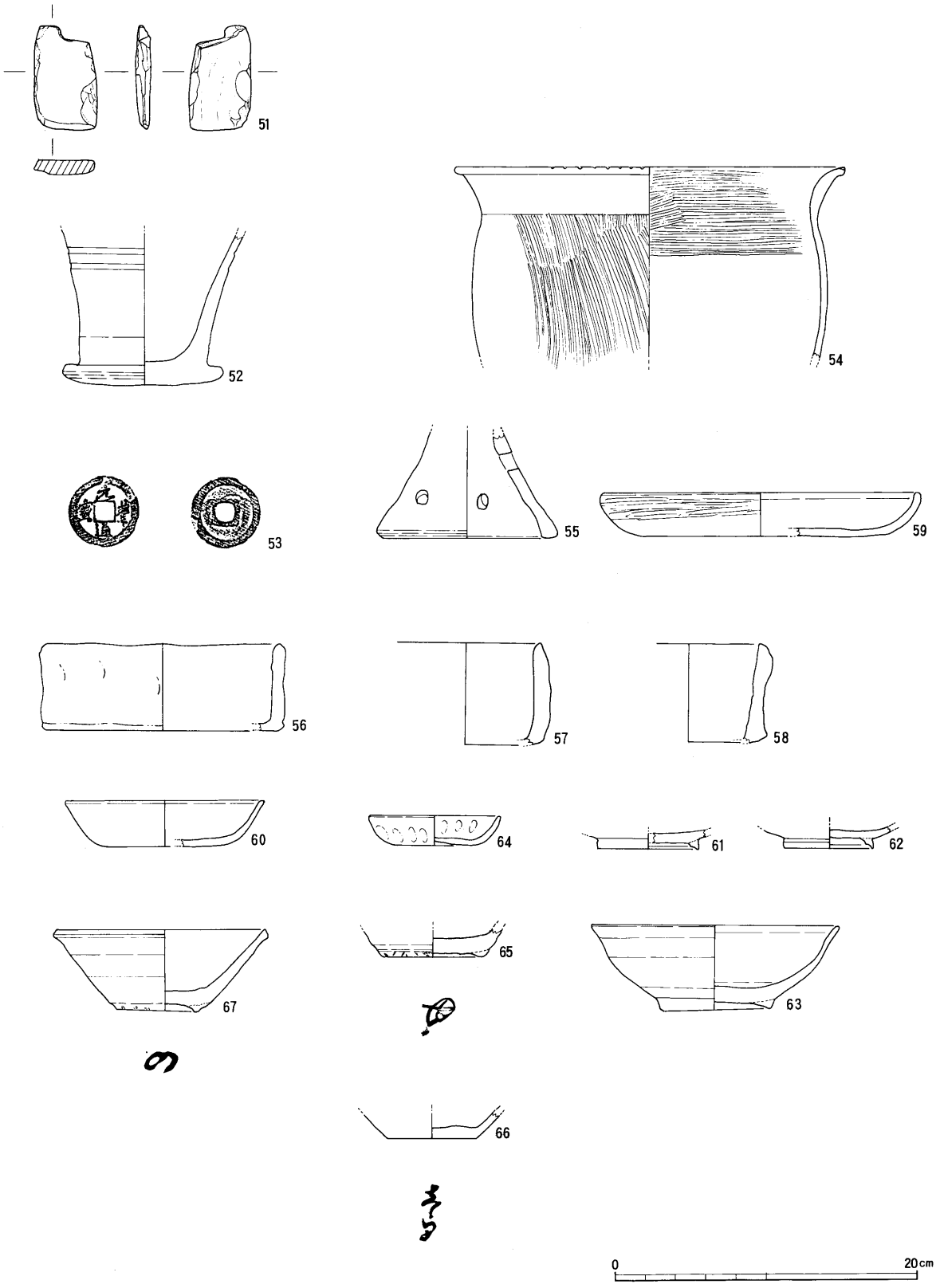
㉒　山口　格「条里プラン出現期の検討」『研究紀要』第6号　1997.3



第7図　出土遺物実測図1（1:4）



第 8 図　出土遺物実測図 2 （1:4）



第 9 図　出土遺物実測図 3 （1:4）

第10図　坪内区画想定図

番号	登録番号	地区	器種	遺構・層位	計測値 口径/器高/底径	調整・技法の特徴	胎土	色調	焼成	残存度	特記事項
1	006-01	A-B 6	土師器 器台	S D 2	10.0/9.9/10.0	内:ナデ、ヨコナデ、外:ナデ	粗	橙	並	ほぼ完存	浮文、透孔3ヶ所
2	018-03	A-A 4	土師器 高杯	S D 2	14.8/12.0	内:ミガキ、シボリ 外:ヨコナデ、ミガキ、ナデ	やや密	橙	良	完存	
3	005-05	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	13.0	内:ヨコナデ、指オサエ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや粗	にぶい黄橙	並	1／4	
4	005-01	A-C 7	土師器 台付甕	S D 2	11.0	内:ヨコナデ、指オサエ後ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや密	浅黄橙	並	口縁のみ	
5	017-06	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	13.4	内:ヨコナデ、指オサエ後ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや粗	やや黄橙	良	1／8	
6	017-01	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	12.6	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや密	にぶい黄橙	良	2／3	
7	005-03	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	12.2	内:ヨコナデ、指オサエ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや密	にぶい橙	並	1／3	
8	017-03	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	13.8	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや密	にぶい黄橙	良	1／6	
9	005-04	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	15.4	内:ヨコナデ、指オサエ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや粗	褐灰	並	1／4	
10	017-04	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	12.4	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや粗	にぶい黄	良	1／8	
11	017-02	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	14.0	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや密	にぶい黄橙	良	2／3	
12	017-05	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	13.4	内:ヨコナデ、指オサエ後ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや粗	灰黄褐	良	1／4	
13	005-02	A-A 4	土師器 台付甕	S D 2	14.1	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや粗	にぶい黄橙	並	1／4	
14	018-02	A-B 7	須恵器 蓋杯	S D 2	12.9	内:ロクロナデ 外:ロクロケズリ	やや密	灰白	良	1／4	
15	006-02	A-B 8	須恵器 蓋杯	S D 2	13.2/3.3	内:ロクロナデ 外:ロクロケズリ、ロクロナデ	粗	灰	良	2／3	
16	015-07	A-C 4	土師器 台付甕	S D 4	13.2	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや粗	にぶい橙	並	1／4	
17	015-08	A-B 4	土師器 小形鉢	S D 5	15.6	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ	やや密	黒褐	並	小片	
18	007-01	A-B 6	土師器 台付甕	S D 7	13.2/29.1	内:ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ 外:工具ナデ、ハケメ	やや粗	にぶい黄橙	良	ほぼ完存	
19	016-05	A-C 6	須恵器 杯蓋	S D 7	14.0	内:ロクロナデ 外:ロクロケズリ	やや密	灰	良	1／4	ヘラ記号あり
20	015-01	A-A 3	須恵器 杯身	S K 1	11.2	内外:ロクロナデ	密	灰白	良	1／7	
21	015-02	A-A 3	須恵器 杯身	S K 1	12.4	内外:ロクロナデ	密	明青灰	良	1／8	
22	018-01	A-A 5	土師器 壺	S D 8	?/6.8	内:ナデ 外:ヨコナデ	やや粗	橙	良	底部のみ	木枝葉痕
23	016-03	A-B 9	土師器 台付甕	S D 8	17.0	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ、縦ハケメ	やや粗	灰白	並	1／4	
24	015-05	A-C 8	土師器 台付甕	S K 9	13.0	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや粗	にぶい黄橙	並	1／5	
25	015-03	A-C 8	土師器 台付甕	S K 9	?/11.8	内:指オサエ、ナデ 外:斜行ハケメ、ナデ	粗	灰褐	並	脚部のみ	
26	008-01	A-C 7	土師器 台付甕	S D11	15.0	内:ヨコナデ、ナデ 外:ナデ、斜行ハケメ	やや粗	黄灰	良	1／4	
27	008-06	A-C 7	土師器 台付甕	S D11		内外:ヨコナデ	やや粗	灰黄灰	並	小片	山陰系
28	008-05	A-C 7	須恵器高杯脚部	S D11	?/10.0	内:ロクロナデ、外:カキメ、ロクロナデ	やや粗	青黒	良	1／2	SK9に先行
29	008-04	A-C 7	須恵器 杯蓋	S D11	15.6	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ヘラケズリ	やや粗	灰白	良	1／4	
30	016-06	A-Y 2	須恵器 杯身	S D11	11.6	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ロクロケズリ、ヘラ切り	やや密	灰	良	2／3	
31	008-02	A-B 5	須恵器 杯	S D11	14.0	内外:ロクロナデ	やや密	灰白	良	1／8	
32	016-08	A-Y 2	須恵器 杯身	S D11	11.1	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	やや密	灰白	良	1／5	
33	016-01	A-B 3	土師器 杯	S D12	13.2	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ	やや密	橙	並	3／4	
34	016-07	A-C 5	須恵器有蓋高杯	S D12	?/11.4	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、カキメ	やや密	灰	良	1／3	
35	009-01	A-C 7	土師器 高杯	S D15	15.2	内:ヨコナデ、ヘラミガキ 外:ヨコナデ、ヘラミガキ	やや粗	橙	並	杯部のみ	
36	009-04	A-C 7	土師器 高杯	S D15	?/10.4	内:シボリ、ヨコナデ 外:ナデ、ヨコナデ	やや密	にぶい橙	並	脚部のみ	
37	016-02	A-A 6	土師器 高杯	S D15	?	内:シボリ、ヨコナデ 外:調整不明瞭	やや粗	橙	並	杯部のみ	
38	009-06	A-C 7	土師器 高杯	S D15	12.4/8.8	内:ヨコナデ、シボリ、ヨコナデ 外:ナデ、ヨコナデ	やや密	橙	並	3／4	
39	009-02	A-C 7	土師器 壺	S D15	8.6/11.4/10.9	内:指オサエ、ナデ 外:ヨコナデ、ナデ、ケズリ	粗	にぶい橙	並	1／2	
40	009-03	A-C 8	土師器 台付甕	S D15	17.4	内:ヨコナデ、ヨコハケ 外:ヨコナデ、刺突文、押圧、斜ハケ	粗	灰白	並		
41	009-05	A-C 7	土師器 台付甕	S D15	8.8	内:指オサエ、ナデ 外:ハケメ、ナデ	粗	にぶい黄橙	並		
42	016-04	A-C 8	ミニチュア土器壺	S D15	5.4/2.9	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、ナデ	やや粗	にぶい橙	並	1／2	
43	010-01	A-C 9	黒色土器椀	p 9	15.0/7.4	内:ミガキ、ナデ 外:ミガキ、ナデ、ヨコナデ	やや密	灰白	良	1／2	内黒
44	019-06	B-D 1	土師器 甕	S D 4	20.4	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、ナデ	やや粗	淡黄	並		
45	003-01	A-Y 2	二重口縁壺	包含層II	20.1	内外:ナデ	やや粗	黄灰	並		
46	004-02	A-Y2A2	二重口縁壺	包含層II	19.0	内:ヨコナデ、ケズリ後ナデ 外:ミガキ、ナデ	やや粗	にぶい黄橙	良		
47	011-01	A-A 4	二重口縁壺	包含層II	18.8	内:ヨコナデ、ナデ後オサエ 外:ヨコナデ、斜行ハケメ	やや密	にぶい黄橙	並	1／3	
48	011-02	A-B5～8	土師器小形丸底壺	トレンチ2	13.0/6.9	内:ヨコナデ、ナデ後オサエ 外:ヨコナデ、指オサエ	やや粗	褐灰	並	1／3	
49	011-06	A-A 5	ミニチュア土器脚付壺	包含層II	2.9/5.3/5.5	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、ナデ	密	にぶい橙	並		スス付着
50	012-02	A-B 7	土師器 台付甕	包含層II	10.0/22.2/7.2	内:ヨコナデ、ナデ 外:ヨコナデ、ハケメ、ナデ	やや粗	明褐灰	並	2／3	
51	011-04	A-A 5	磨製石斧	5列トレンチ	7.0/4.1/1.0	表:刃部あり 周縁部:三方に剝離痕あり 裏:刃部なし	粘盤岩	明灰			側縁部に二次加工
52	014-01	A-A 5	須恵器 鉢	包含層	10.7	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ケズリ	やや粗	灰白	並		
53	012-01	A-B 7	元豊通寶（銭貨）	包含層II	2.3/2.43g						初鋳1078年
54	022-01	試No.206	弥生土器甕		25.6	内:ヨコナデ、ナデ 外:刺突、ナデ、タテハケメ	粗	橙	並	1／8	
55	023-02	試No.121	弥生土器台付鉢		11.0	内、外:ナデ、透し、ナデ	やや粗	橙	並		
56	021-01	試No.172	製塩土器		15.5/15.5	内、外:ナデ	粗	橙	並		
57	021-03	試No.172	製塩土器			内、外:ナデ	粗	橙	並		
58	021-02	試No.177	製塩土器			内、外:ナデ	粗	浅黄橙	並		
59	023-01	試No.145	土師器皿A		21.0/2.9	内:ヨコナデ、ミガキ 外:ミガキ、ケズリ	やや粗	橙	並	1／8	
60	020-03	試No.172	土師器 杯		13.0	内、外共に不明瞭	粗	淺黄橙	並		
61	021-05	試No.26	緑釉陶器		6.0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸きり痕、貼付ナデ	密	灰白	並		
62	021-04	試No.55	緑釉陶器		6.7	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸きり痕、貼付ナデ	密	淺黄橙	並		
63	020-01	試No.250	陶器山茶椀		16.5/7.3	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸きり痕、貼付ナデ	やや密	灰白	並	1／3	
64	023-03	試No.194	土師器小皿		8.6/1.9	内、外:オサエ後ナデ	やや密	灰白	並	1／3	
65	023-05	試No.76	陶器山茶椀		6.2	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸きり痕、貼付ナデ	やや粗	灰白	並		
66	023-04	試No.123	陶器山茶椀		5.8	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸きり痕、貼付ナデ	やや粗	灰白	並	1／2	墨痕「壱郡」
67	020-04	試No.40	陶器山茶椀		14.0/5.5	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、糸きり痕、貼付ナデ	やや粗	灰白	並	1／3	墨痕「の」

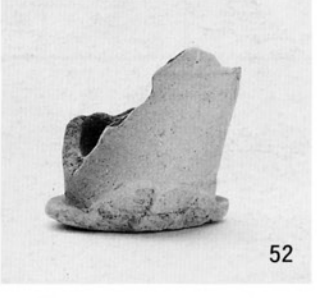
第1表　出土遺物観察表

PL 1

鳥井前地区遠景（北から）

鳥井前地区（南から）

高入地区（東から）



出土遺物（1:3）

報告書抄録

ふりがな	かんべいせきはっくつちょうさほうこく
書名	神戸遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１９３
編著者名	中川　明
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL 0596－52－1732
発行年月日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かんべいせき 神戸遺跡 とりいまえちく 鳥井前地区 たかいりちく 高入地区	つしみなみこうじ 津市南河路 とりいまえ 字鳥井前 つしかんべ 津市神戸 たかいり 高入	24201	598	34° 42′ 08″	136° 28′ 51″	1998.6.22 ～ 1998.9.8	1,050	平成10年度県営ほ場整備事業（津中部地区）に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神戸遺跡 鳥井前地区	集落跡	古墳時代 奈良時代 平安時代	溝　16条 掘立柱建物　１棟 掘立柱建物　１棟	S字甕 須恵器蓋杯 黒色土器椀	

平成11(1999)年３月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告193
神戸遺跡発掘調査報告
―鳥井前地区―
1999年３月
編集
発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　有限会社第一プリント社